

令和3年度秋田県放課後児童支援員認定資格研修 研修レポート抜粋

(誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります)

県央会場

科目 ⑤児童期(6～12歳)の生活と発達

- ◆ 私がこの科目を通じて理解できたことは、いつの歳でも課題があるということです。とくに児童期は、乳児期や幼児期のように保護者が側にいる時期とは違い、児童期ならではの世界観があったり、自身の保護者には話せないことがあったりすることが多くあるなど、子どもたちを見守っていて感じています。それぞれの課題に直面している今だからこそ温かく見守っていきたいと思います。
- ◆ 学童期(低学年から高学年)の特徴を教えてくださいました。今後、学童保育の現場で参考になる話がたくさんありました。例えば、低学年の学童同士がケンカをしたときに、仲裁することの難しさを日々感じていましたが、そこには自己中心性や論理的な思考が未獲得であるなどといった段階的特徴があるためだと分かりました。また、学習時にもそれぞれの発達段階にあった指導を心掛けていこうと思いました。
- ◆ 発達心理学は以前にも学んだことがあり、あらためて乳児期、幼児期の関わりも重要であることや、この仕事をしていく上で児童期とどう関わっていけばその子がのびのびと成長していくことができるのかということを考えることができ、一つひとつの声掛けが大切であると思った。学童期は「勤勉性対劣等感」の段階で、今思えば私も小学生の頃はこうだったな、こういうときにこういう声かけをしてもらって嬉しかったなど、振り返ることができた。
- ◆ 今回の講義で再確認できたことが2つあります。1つは、低学年の特徴として言葉や思考が幼児期に近いということと、もう1つは、中学年の特徴として、やればできそうなのにやらないということです。低学年のうちは身体は大きくなっていてもまだまだ幼い部分が多いということを忘れてはいけないと思いました。中学年になると他者を比較し、できないと恥ずかしいという気持ちも多く見られるので、より配慮が必要だと感じました。
- ◆ 私が勤務している職場の子どもは7～9歳で、とても共感することが多かった。特に感じたところは、7～8歳は自己中心性がより強くみられ、9歳になると周囲をよく見て言動することが多いということです。7～8歳は「子どもらしい」と感じるのも、自己中心性からくることなんだなと学ぶことができました。研修後の勤務では、いつもの見守りの仕事よりも子どもたちを理解した見守りに変化していることに気付きました。